

現代イランの女性たちとイスラーム文化

桜井 啓子 早稲田大学教授

イスラーム的規範と女性

イランの正式な国名は、イラン・イスラーム共和国。国家の最高指導者はもちろんのこと、選挙で選ばれる大統領もまたイスラーム法学者という筋金入りのイスラーム国家である。当然のことながら政治から日常生活に至るあらゆる側面にイスラームの規範が適用されており、それを守ることが国民の義務とみなされている。女性たちの被るヴェールもそうした規範の一つである。

現在のイランでは、異教徒であろうが、外国人であろうが、女性であるかぎり外出の際には、全身をすっぽりと覆うチャドルか、髪を隠すスカーフと身体の線を隠すコートを着なければならない。以前ほどではないが、今でも女性の理想的な外出姿を示したポスターを見かけることがある。

イスラームが、女性にヴェールの着用を求めるのは、コーランに次のような一節があるからだ。

「それから女の信仰者にも言っておやり、慎しみぶかく目を下げて、陰部は大事に守っておき、外部に出ている部分はしかたがないが、そのほかの美しいところは人に見せぬよう。胸には蔽いをかぶせるよう。自分の夫、親、舅、自分の息子、夫の息子、自分の兄弟、兄弟の息子、姉妹の息子、自分の（身の廻りの）女達、自分の右手の所有にかかるもの（奴隷）性欲を持たぬ供廻りの男、女の恥部というものについてまだわけのわからぬ幼児、以上の者以外には決して自分の身の飾り（身体そのものはいうまでもない）を見せたりしないよう。うっかり地団太ふんだりして、隠していた飾りを気づかれたりしないよう。」（井筒俊彦訳『コーラン』第24章31節より）

つまり、この節によれば、女性は身内以外の男性に女性固有の美しさを見せてはならず、また身内以外の男性がいる場では、女性はヴェールによってその美しさを隠



女性の理想的な外出姿を示すポスター

さなければならないということになる。

加えて、コーランには、「アッラーはもともと男と（女）との間には優劣をおつけになったのだし、また（生活に必要な）金は男が出すのだから、この点で男の方が女の上に立つべきもの。」（井筒俊彦訳『コーラン』第4章38節より）といったような一節もあることから、女性はできるかぎり外出しないほうがよい、男女の空間は分離したほうがよい、女性の社会活動を制限するべきであるといった主張は説得性を与えてきた。イスラームが男性優位の宗教だと考えられる所以でもある。

とはいえイランの女性の現実が、こうした理念によってのみ規定されてきたわけではないし、理念自体も時代や状況によってさまざまに解釈されてきた。

イスラーム化の効用

第二次世界大戦後、親米的な国王のもとで急速な近代化を経験したイランでは、都会を中心に西洋的な生活習慣や考え方が浸透しつつあったが、1979年の革命でそうした風潮は一変した。革命とともに誕生した政権は、女性に対する服装規定、公共の場における男女の空間分け、イスラーム法にもとづく女性の権利の制限などのイスラーム化政策を打ち出した。こうし

た流れを支持した女性たちがいる一方で、このままイスラームへの回帰が続くならば、イラン女性は、家庭に閉じ込められ、社会から取り残されてしまうのではと危惧した女性たちも少なくなかった。それというのも新政権の成立とともに、国王の時代に女性に与えられた法的権利の多くが、イスラーム法に反するとして撤回されたり、女性の適性に合わない職種であるとの理由から職場を追われたりする女性があつたことを絶たなかったからである。

しかし、歳月が経過するなかで、こうしたイスラーム化が、すべての分野で女性に不利だったわけではないことがしだいに明らかになってきた。特に注目されているのは、イスラーム化が、全体として女性の識字率向上に寄与したという点である。革命後、イスラーム化推進のために男女別学、女子校への女性教師派遣、宗教教育重視のカリキュラムなどが推進されてきた。こうした政策は王政時代に西洋的な価値に親しんでいた都市部の中間層や富裕層には不評であったが、農村や地方の中小都市に暮らすイラン人にとっては、なじみやすく、受け入れやすいものだったのである。宗教教育の重視は、学校に通うと宗教心が薄れると考えていた親たちを安心させ、男女別学は、年頃になった娘が男性教員に教わることや男子生徒と同じ教室で学ぶことを心配していた親たちの不安を払拭した。

政府の教育普及政策の狙いは、イスラーム・イデオロギーの浸透や政権の支持基盤である貧困層の救済という政治的なもので、必ずしも女子のエンパワーメントにあったわけではなかったが、結果として女子の教育水準を飛躍的に上昇させることになった。現在では、一部の辺境地域をのぞけば、初等教育は皆学に近づきつつある。初等教育の普及とともに中学や高校への進学率も伸び、各教育段階における女子比率は男子のそれに近づきつつある。1981年度と2003年度の統計を比較すると、小学校の女子比率は40%から48%へ、中

学では35%から46%へ、高校は31%から48%へと上昇した。

最近になって注目を集めているのが、高等教育機関における女性比率の上昇である。大学進学を目指すイランの若者の第一希望は、学術技術省が正式に認可する政府系大学・高等教育機関への入学だが、そのためには、年一回実施される大学統一入学試験に合格しなければならない。しかし政府系の大学数は限られていることから、毎年、合格できるのは全受験生の一割にすぎない。さらに高得点を取得できなければ、希望の学部や大学に進学することはきわめてむずかしい。

イランでは、1999年に初めて、大学統一入試の全合格者に占める女性比率が53%と男性を凌駕した。その後もこの傾向が続き、2002年には実に62%を記録した。こうした傾向が続いた結果、すでに多くの学部で、女性比率が男性比率を上回るという事態が発生している。イランでは男女ともに、医学部を筆頭に理数系学科の人気の高いが、医療系学部の女性比率は70%、基礎科学系学部は56%、人文系は52%、農業・獣医系は46%となっている。

女性の社会進出

イスラーム化は、特定分野における女性の社会進出にも有利に働いた。学校や医療機関などで男女の空間分けが浸透したことから、こうした職種での女性の需要が伸び、高学歴化した女性たちの就職先となった。2002年現在、教育省は51万人、保健・医学教育省は11万人の女性公務員(教師、

医師、保健婦など)を雇用しており、両省ともに女性公務員は全体の45%を占めている。

女性中心の職場が増えたことに加え、ヴェール着用が義務化されたことで、男女がともに働く職場でも夫や父親の理解を得やすくなったという。職場では、まだまだ女性に補助的な役割が期待されることが多いが、ヴェールとコートというイラン流ビジネス・スタイルの女性たちが、男性と互角に渡り合っている姿を目にすることもある。

しかし、イスラーム化だけが、女性の就労を促進したわけではない。8年に及ぶイラン・イラク戦争の結果、夫や父親を亡くし、一家を支えなければならない女性たちが増えてしまった。さらに戦争で多くの生産設備を失ったことや欧米との関係悪化が招いた経済制裁の影響で、イランは、インフレや経済の低迷に苦しんできた。そうした中で、妻の収入に頼らなければならない家庭が増えたことも、女性の社会進出の追い風になったと言われている。

革命直後は、女性の家庭回帰が奨励され、保育所が閉鎖されるといったこともあったが、最近は、保育所も増え、若い女性たちがホテルのフロント係、スーパーのレジ係、ファーストフード・ショップの店員など、これまでイスラーム的な規準からあまり好ましいとは考えられていなかったような職種にも就労するようになった。

国民の意識調査の結果をまとめたイスラーム文化指導省発行の小冊子を見ると、社会の変化とともに女性の就労に対する意識が変化していることがわかる。女性の家庭外就労に賛成かという質問に対し、賛成と

答えた男性は、1974年には全体の19%に過ぎなかったが、1995年には46%にまで上昇していることから、男性の意識変化をみることができる。あるポストに人を任命する場合、もし条件が同じであったら男性を優先するべきだかという問いに対して、男性は全体の52%が、女性は全体の37%がそうすべきだと答えている。もし再び生まれるとしたら男性と女性のどちらを希望するかという質問に対しては、8割近い男性が再び男性に生まれたいと答えているのに対して、再び女性に生まれたいと答えた女性は、4割程度に留まっている。これらの意識調査からもわかるように、女性の高学歴化や社会進出が進みつつあるとはいえ、イラン社会はまだ男性優位の社会といえそうだ。

ポスト革命世代の女性たち

高齢化が進む日本とは対照的に、イランは、人口の60%を24歳以下の若年世代が占めている。1979年の革命以後に生まれたポスト革命世代は、厳格なイスラーム体制のもとで育ち、学校教育やメディアを通じてイデオロギーとしてのイスラームを叩き込まれ、男女別の教育のなかで、イスラーム女性の理想を教えられてきた。だが、その一方で若年世代は、この数年、急速に普及した衛星放送やインターネットなどのメディアを通じて、海外からの情報に接してきた。その結果、若者の間でイスラーム的規範は相対化され、西洋的な価値や文化への憧れが強まっている。

こうした若年世代の台頭は、イスラーム



最近若者に人気のあるファーストフード店。販売しているのはメキシコ料理のタコスやブリトーで、若い男性と女性と一緒に働いている。



ショッピング・モールにあったウイッグの店。ヴェールをぬぐとカラフルなかつらでおしゃれをしている女性もいることがわかる。



テヘランの英語学校で学ぶ小学生たち。イランでは最近グローバル化の影響で英語学習が大人気である。



バスの中。前方が男性席、後方が女性席に分かれている。



女性の独唱は許可されていないが、最近女性の合唱は許可されるようになった。このCDジャケットのグループは若者に人気のポップスグループ。

路線を堅持したい政府にとって最大の「脅威」となっている。イスラーム的価値を守るという名目で、政府は一貫して、西洋からの情報流入に厳しい規制を強いてきたが、ビルの屋上には、衛星放送受信用のアンテナが林立し、街のいたるところにネットカフェが誕生しているのが実情だ。新しいものを求める若者が集まるショッピング・モール、カフェ、レストランなどには、ショーウィンドーのディスプレイから陳列されている商品まで、欧米の流行が取り入れられている。ビデオテープ、音楽CD、DVD よりも手ごろなVCDなどは、すでに氾濫しており、違法コピーもあれば、発禁ものもある。欧米に移住したイラン人たちの発行する雑誌やイラン国内で発禁処分となった新聞や雑誌がネット上に公表されることも珍しくない。政府が規制を強化すればするほど、人々と政府との距離は開いている。

こうした海外からのメディアは、女性たちのライフスタイルや人生観に大きな影響を与えている。現状では、女性が、男性のいる公共の場にヴェールなしで姿を現すこと、独唱したり踊ったりすること、身体の線があらわとなるようなスポーツをすることなどは、反イスラーム的であるとの理由で許可されていない。あるいは、裁判官など特定の職業から女性は締め出されている。しかし、若い女性を中心にこうした規制に対する反発は強く、政権もまたそれを無視し続けることができなくなっている。射撃などの一部競技でのオリンピック参加、女性コーラスの解禁、顧問という条件付きではあるが女性裁判官の復活などはその一例である。

また、女性の教育や社会参加の増大は、家父長的な家庭環境にも影響を与え始めている。先に紹介した調査のなかで、家庭における意思決定者について問う質問項目が

あるが、1974年の調査では、男性の8割、女性の7割弱が父親と答えているが、2003年の調査では、男女ともに4割に減っており、代わりに夫婦で決定する、家族で決定するなど答えた人の割合がふえている。家庭内の重要な意思決定に女性が参加できるようになっているといえそうだ。革命から四半世紀、イスラーム国家の看板を掲げ続けてきたイランではあるが、高学歴化し、期待を上昇させてきた女性たちは、静かに、しかし根底からイラン社会を変えつつある。

さくらい けいこ

上智大学文学部史学科卒業。同大大学院外国語学研究所国際関係論専攻博士課程修了。博士（国際関係論）、学習院女子大学教授を経て、2004年より早稲田大学国際教養学部教授。著書に『革命イランの教科書メディア』（岩波書店1999年）『現代イラン：神の国の変貌』（岩波新書2001年）『日本のムスリム社会』（ちくま新書2003年）など。

（写真は筆者撮影）